# 先輩の彼女

作＝genbu



俺は先輩に呼び出された。まぁ、何時もの事だ。大学の空手部に所属して、もうすぐ一年になる。先輩方が下の俺らの都合なんぞ考えちゃいない事は十分に理解している。理解できなかった奴等は、とうにやめてしまった。それに、相手は部の中でも自分と一番、ウマの合う先輩で、先輩というよりは兄貴のような人だった。空手に関しては当然厳しいが、外では随分可愛がって貰っている。呼び出されたのは、寮から少し離れた所にあるコーヒーショップだった。

「ちーっす」

「よう、早かったな」

「そりゃ、中沢先輩に呼ばれればすぐ来ますよ。おい、同じやつ」

「はーい」

いつものウエイトレスだ。

先輩のコーヒーは半分ほどなくなっていた。

俺のコーヒーが出てくると、きゅうに先輩は真顔になった。

「吉田、おまえ俺の彼女知ってんだろ？」

「ええ、リエさんっすよね？」

「もう、別れようと思ってな。っつーか、別れることに事にしたわ」

「まじっすか？　あんなに、かわいい、かわいいって言ってたじゃないっすか！」
　中沢先輩の彼女は、芦崎リエといって、うちの大学から、電車でちょっと行った所にある大学の2年生だ。かわいい上に、外人なみのスタイルをしていて、うちの大学でも有名だった。もちろん、中沢先輩もなかなかの男前で、部長でこそなかったが、空手では、全国大会の常連で、後輩の面倒見もよく、部の要のような存在だった。
「確かにかわいいけどな、もちろん、今でもかわいいと思うけどな・・・」
「だったら、なんでっすか？」
「う～ん…。うまくは言えねぇんだけどな。なんかな、あいつといると駄目になりそうな気がしてな・・・・」
「ええっ？　いつも楽しそうじゃないっすか！？　自分にはわかんないっすよ」
「俺もよくわかんねぇんだけどな。なんつぅかな～・・・・うん、確かに、かわいいし、楽しいんだけどな、なんかこう・・俺自身が腑抜けになっちまうような・・・・」
　本当に先輩自身にも分かっていないようだった。本人が分からないのに、俺が分かるわけがないが、先輩が本気で別れるつもりなのだけは理解した。

　しばらくして、また中沢先輩に呼び出された。どうやら、別れ話は拗れているらしい。
「どうでした？」



「どうもこうも、ねぇよ。向こうがわめきまくっちゃってよ。こっちもつい、声がでかくなってきてな・・・」
「へ～・・・で、結局、どうなったんすか？」
「最後にゃ、喧嘩別れよ。でも、まぁ、これで終わりだろうって思ってたんだけどな・・・。昨日、電話があってよ。もう一回ちゃんと話がしたいっつうんだよ」
「行くんっすか？」
「ああ、でも、行っても、こっちの気はかわらねぇからよ。どうせまた、言い合いになっちまうだろうからなぁ・・・。でよ、おまえ、着いて来てくんねぇか？　第三者がいれば、いくらか冷静に話し合えると思うんだよ。今晩付き合ってくれねぇか？」
　一瞬迷ったが、先輩の頼みでは断れず、結局ついていくことになった。

　俺と先輩はリエさんより先に約束のカラオケボックスに来ていた。
「なんで、ボックスなんっすか？」
「ここの方が、多少でかい声だしても、聞こえねぇだろ？　なんか飲むか？」
　ビールで時間を潰していると 10 分ほどして、リエさんがやって来た。茶色のセーターにこげ茶色のスカート、すらりとした足には革のブーツを履いている。当然、俺がいるとは思わなかったリエさんは驚いた顔をして、すぐに先輩を睨んだ。

それから一時間ほど、居心地の悪い時間が続いた。最初は何とか、やり直そうとしていたリエさんだったが、どうあっても先輩が意思を変える気がないのが分かったらしく、ついには黙りこくってしまった。

「すまないとは思ってるんだけどよ、もう、これ以上話しても無駄だとおもうぜ？」

「・・・わかった。わかったわよ！」

リエさんは乱暴に立ち上がり、しばらく先輩を上から睨んでいたが、ふいに視線をおとし、泣き出した。先輩がちょっと嫌な顔をした。

そうやって、20分ほど泣いていただろうか、リエさんは小声で何か言った。

「ん？　なんだ？」

先輩が立ち上がる。

「・・・抱いて、最後に抱いて。ハグでいいから・・・」

「うん？こうか？」

白いジャージの上下を来た先輩が両手でリエさんを抱きしめた。リエさんも、先輩の太い腕の下から両手を回し、しっかりと抱きついた。小柄なリエさんが、まるで、大きな先輩の中に包ま



れてしまったように見える。

「ゴッ！」

「ああっ！　っく、りっ、リエ！？」

抱き合ったままの二人を横から見ていた俺は、先輩の股間にリエさんの右膝が突き刺さるのを見た。先輩は咄嗟に腰を引いたが、リエさんは抱きついたまま離れない。それどころか、渾身の力で先輩の金玉に何度も膝をめり込ませた。何とか、逃れようとするが、後ずさりするばかりで、ついに壁際まで追い込まれてしまった。リエさんは休むことなく先輩の金玉を膝で撃ち続けている。

「ああっ！　ぐあぁぁぁっ！　よっ！　よせっ、よせぇぇっ！　りっりえぇぇぇっ！」

リエさんは答えない。ただ、黙って膝蹴りをつづけている。

「ぐぉっ！　たっ、タマがっ！　がぁっ！　やっ、やめっ！　つっ、つぶれる！」

力強く打ち続けるリエさんとは対照的に、先輩は明らかに力を失っていった。その大きな体を、壁に寄り掛からせることで、ようやく支えている。太い腕もリエさんを振り解く力さえないようだった。顔は苦痛に歪んでいる。

「おぉぉぉぉぉっ、おっ、おいっ！　たっ、たすけろっ！　吉田！　あがっ！　あぁぁぁっ！　助けてくれぇっ！　潰されるっ！　よっ、よしだぁぁっ！」

俺はようやく我に帰った。慌ててリエさんを抱きかかえると、先輩から引き離した。

「ううぅっ・・・たっ、玉が・・・タマキンが・・・。」

ようやく膝地獄から開放された中沢先輩は両手で股間を押さえ、壁にも垂れたままズルズルと尻から落ちた。だらしなく両足を広げ、両手は力なく股間をカバーしている。目は半開きで白目をむき、泡を吹いている。意識が朦朧としているようだ。

「先輩！　だいじょうぶっすか？！」

軽いパニックに陥っていた俺は先輩に駆け寄ると、なんとか立たせようと、先輩のわきの下から両腕を背中の方へ挿し込み、両足を踏ん張ろうとした。

「じゃましないで」

突然後ろから、がら空きの俺の股間にリエさんの蹴りが飛んできた。

「！！！」

俺は先輩を離すと股間を押さえて、床に倒れた。胃を突き上げるような痛みが襲って来て、俺は吐きそうになった。

そんな俺を無視して、りえさんは、股間に当てられているだけの先輩の両手を足で乱暴にどけ、がら空きになった先輩の股間めがけ、足を後ろへ高く振り上げた。先輩の両足の付け根には、すでに痛めつけられた金玉が蹴ってくれと言わんばかりに、白いジャージを膨らませている。床に



倒れたまま、俺はリエさんの尖った靴のつま先が、正確に先輩の金玉に突き刺さるのを見た。

「つぎゃぁぁぁぁっ！！」

先輩は恐ろしい叫び声を上げ、失神した。股間を押さえ、海老のように背中を丸めて、痙攣している。

「せっ、先輩？」

俺は、何とか上半身を起こすと、恐る恐る這うようにして、先輩に近づいた。口からは胃液が垂れ、押さえた股間は血と精液で濡れていた。

「・・・おっ・・・終わった・・・・」

俺は、中沢先輩が男として終ってしまったのを、漠然とたが、認識した。

「・・・先輩・・・・。腑抜けどころか・・・男ですら・・・・なくなっちまった・・・」

いつの間にか、リエさんは呆然としている俺の後ろに回っていた。体が硬直して動かない。蛇に睨まれた蛙。そんな言葉が俺の脳裏を掠めた。

「あんたも、人の別れ話にのこのこ付いてくるなー！！」

四つん這いの俺の股間にも、強烈な蹴りが飛んできた。

「っぐぇっ！」

俺の意識はそこで切れた。